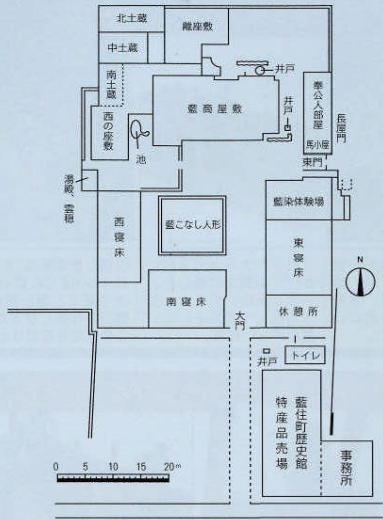
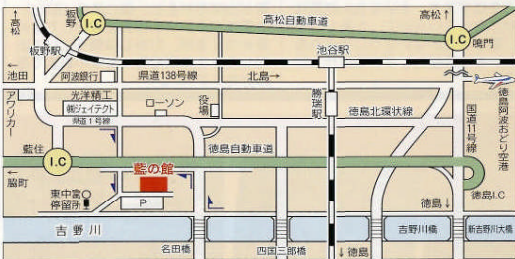


館内見学場所の配置



- 藍の館への交通
- JR徳島駅前から徳島バス（二条・鴨島行）東中富停留所下車、徒歩5分
 - 徳島バス光洋精工前停留所下車、徒歩10分
 - JR高徳線・勝瑞駅下車、タクシーで10分
 - 徳島駅前より車で約25分、徳島空港より25分
 - 藍住ICより5分。板野ICより10分。



■入館料金

	一般	団体 (20名以上)
大人	300円	250円
中高	200円	150円
小学	150円	100円
身障者手帳持参	100円引	

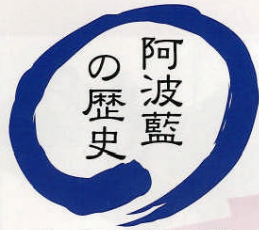
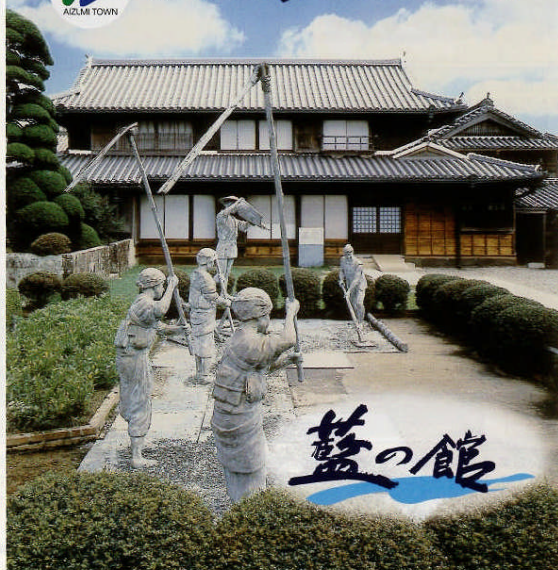
開館時間 9:00~17:00
 藍染体験 9:00~16:00
 休館日 ●火曜日(尚祝祭日は開館)
 ●12月28日~1月1日
 ●1月2日より開館

■お問い合わせは——一般社団法人 藍住町観光物産協会
 771-1212 徳島県板野郡藍住町徳倉宇前西172
 藍住町歴史館「藍の館」 Tel 088-692-6317 Fax 692-6346

AIZUMICHO HISTORICAL MUSEUM



来て、見て、aiのある町 あいずみ



阿波藍の歴史

阿波の北方といわれる吉野川流域の農村は、日本最大の藍作地帯として知られていました。その起源は平安時代の初期に、荒妙という布地を織っていた阿波忌部氏が栽培したのだという伝承があります。最古の資料は宝治元年(1247)に町内の見性寺を開基した翠桂和尚が、そのころ寺のあった美馬郡岩倉(協町)の寺地染

葉(藍)を栽培し、衣を染めたことを記した『見性寺記録』です。その後藍作は下流域一帯にひろがり、文安2年(1445)には大量の葉藍が阿波から兵庫の港に荷揚げされたことが、『兵庫北関入船納帳』に記録されています。

戦国時代までの阿波では、葉藍を水に漬けて染め液をつくる沈殿藍の技術しかなかったのですが、天文18年(1549)に三好義賢が上方から青屋四郎兵衛を呼び寄せ、すくもを使った染めをはじめ、またすくもの製法を伝えたので、やがてこの地が全国的な藍の大産地となっていったのです。(「みよしき」による)

藍商屋敷【旧奥村家】

文化5年(1808)建築の母屋をはじめ、3棟の寝床(藍加工場)や贅をつくした西座敷に、阿波藍商の隆盛を偲ぶことができる。東寝床の藍栽培のプロセス展示を見、藍染めに挑戦することで、あなたも藍のもつロマンに魅せられることだろう。優れた藍色を伝承した伝統ある天然藍で藍染が体験できます。(団体予約あり)



▲東寝床=藍栽培の展示場



▲母屋=みせは商談の部屋



▲大門=徳島城の古財で建てる



▲母屋=番頭の執務室

藍住町歴史館 藍の館 展示室



▲江戸時代小紋の訪問着



▲大正期の藍染めうぶ着



▲元禄時代作品文化財



▲幕末木綿染と藍入花瓶



▲東寝床藍染体験場



▲明治20年 建築書院造器器床



▲西座敷中庭



▼西座敷=すばらしい欄間



▼東門と馬屋



▼母屋=買付け客の応接室

阿波藍の栽培

製作者 河野 操 女史寄贈

苗代でたねまき 間引き



虫とり



苗とり



移植



麦刈り



施肥



お水取り



藍葉刈り



夜切り



1月中旬に地ならしをして、節分直後の2月上旬苗代に種をまくのが最適とされていたが、いまは3月中旬にまいている。

2週間後の3月上旬に行う。苗をいためないように梯子を渡して抜き取っていた。

間引きのあと、苗につく根切虫や羽虫が、夜の間に落ちておいたよじらずに上がってきたものを、たたき落として捕殺した。

種まきから75日を経過した4月中旬か下旬に苗代から抜き取って本畑に移植する。昔は麦をつくっていたので、麦の間に移植していた。

こうすると、麦が風よけ、日よけの役割を果たしてくれるので都合。いまは麦を作らないので、作業を1ヵ月おくらせている。

畑は藍だけになる。麦株をあいがきを牛馬にひかせて十分に整地する。その後は土寄せが大切な作業となる。

麦刈りの7~10日あと、肥料を根元によく施す。肥料はしん粕・豆粕・かりん酸石灰・チリ硝石・硫酸アンモニア・人糞尿・諸魚粕などを使用していた。

毎年の水害で灌がい施設が流されたため、藍畑に井戸を掘り、水を汲み上げて、一面にひろげて灌水をした。

7月下旬から8月下旬にかけて葉藍を取植した。1反の藍畑に男2人、女3人ほどで作業をした。夏の暑い作業。

収穫した葉藍は、その夜のうちに1cmほどに切り刻んだ。朝まで置くことで葉が乾燥するので徹夜の作業となった。そのためこの作業を夜切りといった。

すくもの加工

あいこなし



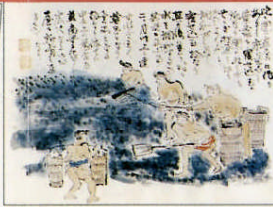
細かく刻んだ葉藍は、翌日の早朝から庭で乾燥し、からさおでたたいて葉と葉脈を分離する。それをあいすりで摺りこむ作業をする。夕刻には大箕でよく乾燥したものを風をおこして飛ばし、葉と葉脈を完全に分離し、葉は葉、葉脈は葉脈で俵に詰め、寝床に保管する。

寝せ込み



9月になると、寝床に保存してある藍を俵から出し、山積みしながら水を打つ。4~6日もすると発酵して摂氏65~70度の高温となる。寝床はアンモニア臭が立ちこめ、目も開けていられないほどである。

きりかえし



一つの山を一床という。そこに積んだ葉藍が万遍に発酵するように、20回ほど移動する。切り返しという重労働が100日ほどつづく。

ふとんかけ



葉の仕上げが近づくと、むしろで葉藍を覆い(ふとんかけ)平温の状態になるのを待つ。そうすると葉が12月初旬に出来あがる。

すくも



むしろをはすすと、水分を含んだ葉は団子状になっているので、おしでおろし、葉がいたまないように手入れをすすと、もう商品としての葉は仕上げとなる。

俵づめ



葉が出来あがると、俵に詰め(60kg)で保存する。いまは葉を溶解して染め液をつくるが、むかしは藍玉にして出荷した。ただ筑前売りは葉のまま積み出されていた。

阿波藍の流通

藍商の店頭



藍商の店頭は、いつも葉藍や葉を売り込みに来る仲買人や藍玉の買い付けにくる藍問屋の人たちがきて賑わった。

手板



葉は品質を鑑定して、すく値を入れている。その鑑定法を手板仕方といって、葉を練って団子にし、和紙に押しつけてその色調や濃淡で品質とすく値を判断した。

藍大市



12月の徳島で開かれた藍大市は、藍の品評会でもあり、全国から来た問屋の商人たちとの大商いの場であった。

玉つき



藍の商談がまとまると、藍商たちは、景気よく玉つきをして藍玉に仕上げ、いよいよ出荷の準備に大いそぎとなった。玉つきは庭一面に木臼を出し、一人一臼で伊勢音頭の歌に合わせて景気よく掛く。

出荷



多くの藍商たちは新町川畔に藍倉をもち、一時保管しておいて、別宮港や津田港とか撫養港まで小舟で小出しし、廻船によって藩外の市場に出荷した。

藍染め

藍だて



葉は水に溶解しないので、灰汁(アルカリ液)で液状とする。その水面にコバルト色の泡(藍の華)が立つと染められる状態になる。

染め



藍染めは藍液中のインディゴホワイトを附着させるが、それを空気中に出し十分酸化させないと発色しない。こうして染めと酸化を何度くり返しながらかめ上げる。

乾燥



染め上げた糸や綿布は、十分に水洗いしたあと、乾燥させた。藍は殺菌力があるので、古くから兵衣や農良着にはとくに重宝がられた。